



Title	出雲国風土記諸本の親疎関係
Author(s)	宮澤, 俊雅
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 111, 71-84
Issue Date	2003-11-28
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/34053">http://hdl.handle.net/2115/34053</a>
Type	bulletin (article)
File Information	111_PR71-84.pdf



[Instructions for use](#)

## 出雲国風土記諸本の親疎関係

宮 澤 俊 雅

—

伝本が四本の場合を、出雲国風土記を例に考察する。もちろん、出雲国風土記に伝本が四本しかないというわけではない。既に四本の関係を論じた論説があるので、それと対比できるように四本に限定するのである。

日本古典全書『風土記 下』の出雲国風土記は、倉野本を底本としているが、そこで、小野田光雄氏は「出雲国風土記の底本について」を記して、A倉野憲司博士所蔵本、B細川護貞氏所蔵本、C岸崎時照著出雲風土記鈔、D今井似閑編万葉緯所収出雲国風土記の四本の中では、A倉野本が祖本からの逸脱が最も少ないことを論じている。その根拠の一つに、四本相互の異同の集計を用いている。まず四本の異文数は

一表のやうになる。〔≡は相等しい、≠は等しくないことを示す。〕  
 A・B・C・D四種の本を比較し、相互に異なる事例は約一三四〇例ある。それを類別すると、第

として、(第一表)の形で示し、

(第一表)

a,	$A = B \neq C = D$	680	例
b,	$D \neq A = B = C$	215	
c,	$C \neq A = B = D$	199	
d,	$A = B \neq C \neq D$	94	
e,	$B \neq A = C = D$	75	
f,	$C = D \neq A \neq B$	34	
g,	$A \neq B = C = D$	31	
h,	$A = C \neq B \neq D$	4	
i,	$A = D \neq B = C$	2	
j,	$A = D \neq B \neq C$	2	
k,	$B = D \neq C \neq A$	2	
l,	$A \neq B \neq C \neq D$	2	
計		1340	

(第二表)

$A = B (a + b + c + d)$	1180	例
$A = C (b + e + h)$	294	
$A = D (c + e + i + j)$	278	
$B = C (b + g + j)$	248	
$B = D (c + g + k)$	232	
$C = D (a + e + f + g)$	820	

(第三表)

$A \neq B = C = D$	31	例
$B \neq A = C = D$	75	
$C \neq A = B = D$	199	
$D \neq A = B = C$	215	

そして、さらに

第一表からA・B・C・D相互の緊密度を求めると、第二表のやうになる。

相異例一三四〇のうちA||Bは一八八で全例の85%を占め、次いでC||Dの92%となつて、A・

B・C・DはA・B、C・Dの二つグループに分け得ることが知られる。次に、四本に共通の祖本を想定した時、 $A \parallel B \parallel C \parallel D$ といふ座標から、各本ほどの程度逸脱してゐるかを見ると、第三表のやうになる。として、(第三表)を挙げ、この数値を根拠に

即ち、倉野氏が最も逸脱度の少ない本であることがわかる。以上のやうな見方は極めて形式的なものであるが、Aを底本とする一つの根拠となる。

と結論づけるのである。小野田氏は、これだけを論拠にしている訳ではなく、また、倉野氏が他の三本に比して祖本に近いであろうということも納得の行くところであるが、ここに挙げた数的処理は、祖本からの逸脱度を量るものとしては何の意味もないことは、例えば、以下のように操作を試みれば、はつきりするであろう。

## 二

上記、第一表の数値を利用して、例えば、B本を除き、A・C・Dの三本だけで、上と同様の処理を試みよう。

A・C・D四種の本を比較し、相互に異同のある事例は約一二六三例ある。それを類別すると、第四表のやうになる。第四表からA・C・D相互の緊密度を求めると、第五表のやうになる。相異例一二六三のうちC∥Dは七四五で全例の58.9%を占め、次いでA∥Cの17.3%となつて、A・C・DはA、C・Dの二

(第四表)

a ( f g ), A ≠ C = D	680 + 34 + 31 =	745	例
b ( h ), D ≠ A = C	215 + 4 =	219	
c ( j ), C ≠ A = D	199 + 2 =	201	
d ( k l ), A ≠ C ≠ D	94 + 2 + 2 =	98	
e ( i ), A = C = D			
計		1273	

(第五表)

A = C ( b )	209
A = D ( c )	203
C = D ( a )	820

(第六表)

A ≠ C = D	745	例
C ≠ A = D	201	
D ≠ A = C	219	

つグループに分け得ることが知られる。次に、三本に共通の祖本を想定した時、A || C || D という座標から、各本ほどの程度逸脱しているかを見ると、第三表のようになる。即ち、風土記鈔本が最も逸脱度の少ない本であることがわかる。

A・B・C・D・E五種の本を比較し、相互に異同のある事例は約一三四〇例ある。それを類別すると、

(第七表)

a,	$A = B \neq C = D = E$	680	例
b,	$D = E \neq A = B = C$	215	
c,	$C \neq A = B = D = E$	199	
d,	$A = B \neq C \neq D = E$	94	
e,	$B \neq A = C = D = E$	75	
f,	$C = D = E \neq A \neq B$	34	
g,	$A \neq B = C = D = E$	31	
h,	$A = C \neq B \neq D = E$	4	
i,	$A = D = E \neq B = C$	2	
j,	$A = D = E \neq B \neq C$	2	
k,	$B = D = E \neq C \neq A$	2	
l,	$A \neq B \neq C \neq D = E$	2	
計		1340	

(第八表)

$A = B (a + b + c + d)$	1180	例
$A = C (b + e + h)$	294	
$A = D (c + e + i + j)$	278	
$B = C (b + g + j)$	248	
$B = D (c + g + k)$	232	
$C = D (a + e + f + g)$	820	
$D = E (a + b + \dots + l)$	1340	

(第九表)

$A \neq B = C = D = E$	31	例
$B \neq A = C = D = E$	75	
$C \neq A = B = D = E$	199	
$D \neq A = B = C = E$	0	
$E \neq A = B = C = D$	0	

このように、A、C、Dの三本だけで逸脱度を見ると、A本が最も逸脱度が少ないという結論は出ないのである。もう一つ、くどくなるが、D本を二種取り上げて、D本(写本)とE本(D本を翻字した活字本)の二本としよう。D本とE本は全くの同文と見てよいので、A・B・C・D・Eの五本について上と同様の処理を行えば次のようになる。

第七表のようになる。第一表からA・B・C・D・E相互の緊密度を求めると、第八表のようになる。相異例一三四〇のうちD $\parallel$ Eは一三四〇で全例の100%を占め、ついでA $\parallel$ Bの89.4%となつて、A・B・C・D・EはA・B・CとD・Eの二つグループに分け得ることが知られる。次に、四本に共通の祖本を想定した時、A $\parallel$ B $\parallel$ C $\parallel$ D $\parallel$ Eという座標から、各本はどの程度逸脱しているかを見ると、第九表のようになる。即ち、万葉緯本が最も逸脱度の少ない本であることがわかる。

このように、採り上げる本数が異なることに、「最善本」が違つてくる以上、この操作自体が祖本遡源の方法として有効でないことは明らかであろう。小野田氏は独自異文の多寡を祖本からの逸脱の度合いと誤認しているに過ぎない。

### 三

前掲(第一表)の数値は、次のような異文分類表に書き換えられる。(種類の0は独自異文、1は双立異文、2は鼎立異文を示す。異文関係はA本を0で表し、これと異なるものを1・2で示す。)双立異文の例数から、A本・B本対C本・D本の分類は明瞭である。

『出雲国風土記』の諸本の本文の異同を見るには、加藤義成氏の『校本出雲国風土記』が利便である。

四

四本間の異文相互の数は表11のようになり、さらにこれに基づきA本を起点とし、D本を終点とする四本の距離関係を算出すれば表12のようになる。A B群(P)とC D群(Q)の距離を約15とすれば、A P間は約1、B P間は約2、C Q間は約5、D Q間は約5、という距離関係になる。

表10

符号	種類	例数	A	B	C	D
g,	0	31	0	1	1	1
e,	0	75	0	1	0	0
c,	0	199	0	0	1	0
b,	0	215	0	0	0	1
a,	1	680	0	0	1	1
i,	1	2	0	1	1	0
d,	2	94	0	0	1	2
f,	2	34	0	1	2	2
h,	2	4	0	1	0	2
j,	2	2	0	1	2	0
k,	2	2	0	1	2	1
l,	3	2	0	1	2	3

表11

	A	B	C	D
A	—	162	1046	1062
B	162	—	1092	1108
C	1046	1092	—	520
D	1062	1108	520	—

表12

	A	D	本線	支線
A	0	1062	0	0
B	162	1108	116	208
C	1046	520	1612	504
D	1062	0	2124	0



出雲国風土記諸本の親疎関係

該書は、「現存出雲国風土記写本中最も書写年時の古い細川家本を底本とし、比較的大きい欠脱部は風土記抄本をもつて補った」上でこれを底本の配行通りに細川本の一〇〇二行を一頁に四行宛に模刻をして、三〇本の対校本による異文を傍記したものである。

対校本は倉野博士本・徳川家本（蓬左文庫）等の再脱落本系が一八本、再脱落系校訂本が二本、林崎文庫本（神宮文庫）等の、小再脱落本系が二本、出雲国風土記抄本・万葉緯本の補訂本系が二本、出雲国風土記解本・訂正出雲国風土記本等の補訂本系校訂本が四本となっている。

加藤氏によれば、『出雲国風土記』現存諸本の祖本は、島根郡の神社名と巻末道度の条二条が脱落し、前者が神名帳で補われたものであるという。その系譜は概ね次のように想定されているようである。

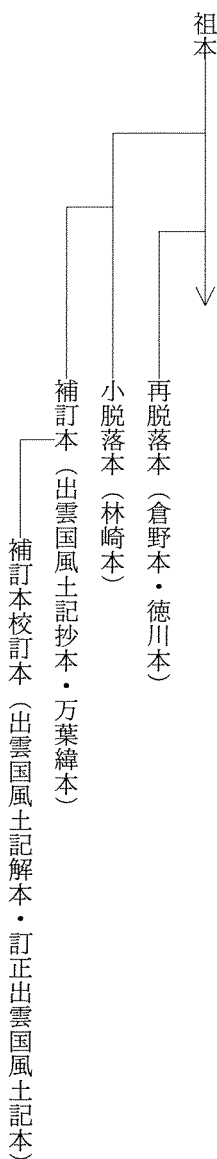


表 13-1

北大文学研究科紀要

種類	例数	細川	倉野	徳川	林崎	抄	緯
0	45	0	1	1	1	1	1
0	13	0	1	0	0	0	0
0	4	0	0	1	0	0	0
0	176	0	0	0	1	0	0
0	232	0	0	0	0	1	0
0	135	0	0	0	0	0	1
1	304	0	0	0	1	1	1
1	163	0	0	0	0	1	1
1	146	0	0	1	1	1	1
1	70	0	0	0	1	0	1
1	14	0	0	0	1	1	0
1	9	0	1	1	0	0	0
1	5	0	0	1	1	0	0
1	4	0	1	0	1	1	1
1	3	0	0	1	0	1	0
1	3	0	0	1	0	1	1
1	2	0	0	1	1	0	1
1	2	0	1	1	0	1	1
1	2	0	1	1	1	0	0
1	1	0	0	0	0	1	1
1	1	0	0	0	1	1	0
1	1	0	1	0	0	1	0
1	1	0	1	0	0	1	1
1	1	0	1	0	0	1	1
1	1	0	1	0	0	1	0
1	1	0	1	0	0	1	1
1	1	0	1	0	0	1	1

五

表 13-2

種類	例数	細川	倉野	徳川	林崎	抄	緯
2	15	0	0	0	1	2	2
2	8	0	0	0	0	1	2
2	8	0	0	0	1	2	1
2	6	0	0	1	1	2	1
2	6	0	0	1	2	2	2
2	3	0	0	0	1	1	2
2	3	0	0	0	1	0	2
2	2	0	0	0	1	2	0
2	2	0	0	1	1	1	2
2	2	0	0	1	2	1	1
2	2	0	0	1	1	2	2
2	2	0	1	1	2	2	2
2	1	0	0	1	0	2	0
2	1	0	0	1	2	1	2
2	1	0	1	0	2	0	0
2	1	0	1	1	1	1	2
2	1	0	1	1	1	2	1
2	1	0	1	1	1	2	2
2	1	0	1	1	2	0	0
2	1	0	1	1	2	1	1
2	1	0	1	2	2	2	2
2	1	0	1	0	2	2	2
2	1	0	1	1	2	1	2
3	3	0	0	0	1	2	3
3	2	0	1	1	2	3	3
3	1	0	0	1	2	0	3
3	1	0	0	1	2	3	1
4	1	0	0	1	2	3	4
9	2	0	9	0	1	1	1
9	1	0	0	0	0	9	1
9	1	0	0	0	9	1	0
9	1	0	0	1	1	9	1
9	1	0	9	0	0	1	0
9	1	0	9	1	1	1	1

『校本出雲国風土記』によつて細川本・倉野本・徳川本・林崎本・風土記抄本・万葉緯本の六本間の異同を数えると一四二〇条に及ぶ。これを対立の違いによつて分類集計すると表13のようになる。(種類の0は独自異文、1は双立異文、2は鼎立異文を示し、欠脱等で六本が揃わないものは9とする。異文関係はA本を0で表し、これと異なるものを1・2・3・4、欠脱等を9で示す。)この表により、諸本相互の関係が、(細川本・倉野本)——(徳川本)——(林崎

本)——(風土記抄・万葉緯) となることが分かる。

相互異文数は表14のようになり、これにより細川本を起点とし、万葉緯本を終点とする距離関係は表15のようになる。

表 14

	細川	倉野	徳川	林崎	抄	緯
細川	—	91	255	839	992	950
倉野	91	—	209	810	963	922
徳川	255	209	—	647	808	765
林崎	839	810	647	—	724	553
抄	992	963	808	724	—	502
緯	950	922	765	553	502	—

表 15

	細川	緯	本線	支線
細川	0	950	0	0
倉野	91	922	119	63
徳川	255	765	440	70
林崎	839	553	1236	442
抄	992	502	1440	544
緯	950	0	1900	0

2、前々節で小野田氏の数値に基づき、細川・倉野群(P)と抄・緯群(Q)の距離を約15とすれば、細川・P間は約1、倉野・P間は約1、抄・Q間は約5、緯・Q間は約5、という距離関係としたが、表15の数値に基づけばP・Q

間を同じく約15とした場合、細川・P間は約14、倉野・P間は約07、抄・Q間は約6、緯・Q間は約5、という距離関係となる。

## 六

『風土記』の活字本文を収める日本古典文学大系（以下「大系」と日本古典文学全書（以下「全書」）では、『出雲国風土記』の本文が、細川本・万葉緯本と比べた場合、どのような位置にあるかを見ておく。まず、大系は次の通りである。

○	細川	緯	大系	三三五例	同文	その文を採用
○		○		八七例	同文	他本の文を採用
○		△		一四例	同文	改定本文を採用
○		▲		六四一例	異なる	万葉緯の文を採用
○		◇		二六〇例	異なる	細川本の文を採用
○		◇		五二例	異なる	改定本文を採用
○		△		一例	異なる	他本の文を採用

次に、全書は次の通りである。

細川 緯	大系	説明	細川本と万葉緯	全書
○	○	三七三例	同文	その文を採用
○	○	七〇例	同文	他本の文を採用
○	▲	一三例	同文	改定本文を採用
○	◇	四七四例	異なる	万葉緯の文を採用
○	◇	四二四例	異なる	細川本の文を採用
○	◇	四七例	異なる	改定本文を採用
○	△	九例	異なる	他本の文を採用

前掲表16の関係距離表に、大系・全書の位置関係を挿入すると表17のようになる。

大系・全書ともに、原形を林崎本に近い形で復元推定していることになる。しかし、だからといって、林崎本の位置、あるいは本線からの林崎本の分岐点が祖本に最も近いと早計に断ずべきではない。風土記抄本も、万葉緯本も、細川本とは千例近く本文が異なっているが、これらの異文は、書承・転写の結果生じたのではなく、校訂・改訂によるものが多いと見られるからである。校訂・改訂が、大系は九〇〇例弱に、全書は六〇〇例程度に押さえられたというところからも知れないのである。

表 17

	細川	緯	本線	支線
細川	0	950	0	0
倉野	91	922	119	63
徳川	255	765	440	70
全書	613	566	997	229
林崎	839	553	1236	442
大系	795	414	1331	411
抄	992	502	1440	544
緯	950	0	1900	0

注

- (1) 小野田光雄「出雲国風土記の底本について」(久松潜一校注『風土記 下』日本古典全書、一九六〇年10月、朝日新聞社)。
- (2) 加藤義成『校本出雲国風土記』一九六八年12月、報光社・出雲国風土記研究会。  
 なお、本稿で用いた北海道大学文学部架蔵の本書は一一一頁から一一四頁まで、校本一六行分が落丁となっており、この部分の比較は本稿では省いてある。
- (3) 秋本吉郎『風土記』日本古典文学大系2、一九五八年4月、岩波書店。